元三、立春、七日、十五日勤仕之、居御臺二本、

〔年中恒例記〕正月一日

御強飯供御儀式は、未の刻に、中膳紅のはかまひとへきぬむねのまもりをかけ、上の御末掛席のきはにて、御こは供御を取渡被申候也、

御手長伊勢同苗四五人各裏打也、御手永の衆へは、大草かちなり取次てわたし申、大草より御こは供御調進によりて也、此御ごはくこの事、曇花院殿被仰之、今世に御こはの儀具、存知之仁ありがたし、曇花院殿なども、一向くわしき事無御存知、よし被仰き、御倉よりの下行に候、

〔内院年中御儀式〕神無月朔日御盃事如常、亥ノ子、近比ハ皆初計也、〇中略入夜御盃ノ事アリ、昆布鮑ナリ、此時ニツク〳〵ト云テ、小キ臼ニ白キ強飯ヲモリ、足付ニのせ、前ニ杵二本置也、是ヲ御前ニ獻ズ、

〔源氏物語六末摘花〕朱雀院の行幸、けふなんがく人まひ人さだめらるべきよしうけたまはりしを、おとゞにもつたへ申さんとてなんまかで侍る、やがてかへり參りぬべう侍るといそがしげなれば、さらばもろともにとて、御かゆこはいひめしてまらうどにもまいり給て、〇下略

〔源氏物語十九薄雲〕こゝはかゝるところなれど、かやうにたちとまり給ふおり〳〵あれば、はかなきくだもの、こはいゐばかりはきこしめすときもあり、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕こはいひは、古の常の飯なれど、粥をいふ故に、それに對してかくいへるなるべし、

〔落窪物語一〕あこぎいかで物參らん、いかにみこゝちあしからんとおもひまはして、こは飯をさりげなくかまへて、いかでと思へどせんかたなければ、〇下略

〔醍醐寺雜事記十一〕座主房雜事日記久安五年